

氏名	中川 朋美	
授与した学位	博士	
専攻分野の名称	文学	
学位授与番号	博甲第 6216 号	
学位授与の日付	2020 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)	
学位論文題目	先史時代における暴力の文化的背景	
学位論文審査委員	教授 松本 直子 准教授 光本 順	教授 清家 章 教授 今津 勝紀 人間文化研究機構国立歴史民俗博物館教授 松木 武彦

## 学位論文内容の要旨

博士論文では、主に縄文時代から弥生時代の日本列島を対象に、受傷者のパターンと埋葬のパターンを明らかにし、さらにその相互の関係から受傷者の社会的地位を明らかにすることで、暴力の文化的背景、すなわち暴力と階層性について検討・考察した。

第1章では、本研究における暴力の概念を整理したうえで、本研究の目的・意義について述べた。まず、本研究における暴力を「意図的に他者に対して身体的な被害を加えたとみなされる行動」と定義し、一定の水準を越えた場合に、集団規模の暴力と表すことを明記した。そのうえで、集団規模の暴力が起こるとされている弥生時代について、受傷者の埋葬様態からその社会的地位を明らかにし、暴力と階層性について検討・考察することを目的とした。先行研究では、暴力に対する意識変化や社会構造への組み込みがあったことが指摘されているが、受傷者の埋葬状況暴力の性格や背景の整理が不十分である。そのため、本研究では、集団規模の暴力である可能性が高い時期・地域の事例を定量的に分析し、受傷状態の整理から受傷のパターンを抽出することで暴力の性格の分化を試み、その上で、埋葬方法から受傷者の位置づけについて検討することにより、これまで暴力の助長要因の1つとして挙げられてきた階層性と暴力の関係について、広い時空間軸から検討・考察することに意義がある。

第2章では、受傷人骨に関する研究に重点を置きながら、暴力についての先行研究、縄文時代から弥生時代の埋葬と階層性について検討した研究における研究視点・方法・議論について示した。さらに、集団規模の暴力以外の暴力の性格を指摘してきた研究を取り上げ、暴力の性格には多様性があることを示した。

第3章では、データの集成方法と受傷人骨の判断基準、分析の方法について明示した。特に受傷人骨の判断基準については研究者によって判断が分かれるため、具体的な事例を提示しながら重点的に記載した。分析方法では、本研究の目的の達成に必要な3つの分析の方法について示した。つまり、①暴力の規模を受傷人骨の数・地理的分布、受傷頻度から検討する分析方法、②暴力の対象者（年齢段階・性別）と受傷の状態（傷の数・位置・方向・治癒痕跡の有無など）から受傷のパターンを抽出する方法・視点、③埋葬方法（埋葬施設の種類・規模、副葬品の数・組成、埋葬施設の位置など）から埋葬のパターンを抽出する分析方法・視点である。

第4章では、①～③の分析方法を用いて、受傷人骨数が比較的多い横隈狐塚遺跡（福岡県）と隈・西小田遺跡（福岡県）に焦点を当てて、暴力の規模、受傷パターンの変化と埋葬の関係性を分析・検討した。

第5章では、先行研究における暴力の規模の検討方法について再整理したうえで、縄文時代・弥生時代の暴力の規模について検討した。さらに、国内データの比較資料として、先行研究で縄文時代との類似点が挙げられつつも「戦争」が始まるとされてきた中石器時代のヨーロッパの事例について同様の分析を行い、縄文時代・弥生時代の分析結果と比較・検討した。

第6章では、第4章で取り上げた横隈狐塚遺跡と隈・西小田遺跡を除く時期・地域に焦点を当てて、縄文時代・弥生時代の受傷のパターンを抽出した。検討している。第5章の分析・検討から、弥生時代の北部九州・近畿地方・鳥取県青谷上寺地遺跡で集団規模の暴力が生じていた可能性があることがわかったため、これらの地域について第4章の結果と比較し、時期・地域的傾向の範囲・差を明らかにした。こうした受傷のパターンの差異を踏まえたうえで、第7章では、同様の時期・地域について埋葬方法のパターンを分析・検討した。

第8章「暴力の文化的背景と階層性」では、第4～7章までの分析・検討結果をもとに、暴力の性格、暴力と階層性の関係性、そして、暴力を受ける状況に置かれる人や暴力行為に対する認識の関係性について考察し、受傷のパターンから儀礼的な性格のものも含む多様な暴力が存在しており、そのパターンによって受傷者の社会的位置づけが異なっていたこと、さらに受傷者の埋葬におけるエラボレーションの程度は、社会的階層化の進行および地域間の格差も反映した変化を示したことを論じた。

第9章では本研究における課題と今後の展望について示した。

## 学位論文審査結果の要旨

2月4日15時より学位審査会を開催し、学位論文の内容について40分程度の口頭発表の後で、審査委員による質疑応答および講評を行った。総合的には、日本列島における縄文時代から弥生時代の人骨5812例、ヨーロッパ中石器時代の人骨2055例について網羅的にデータを収集して受傷率の分析を行い、弥生時代については約半数の資料を実見調査して受傷の状況や埋葬の様相について詳細な実証的研究を行った結果、先史時代の暴力の実態や変化、社会構造との関係について新しい知見を提示したことについて高い評価が与えられた。

審議の過程では、骨に受傷痕跡が確認できない事例を受傷者とみなす認定方法が妥当であるかという方法論的な疑問や、データに基づいて検証するための仮説をより具体的に示したほうがよいとする意見が審査委員から出され、集団的暴力を定量的に認定する際の数値的基準の妥当性についても議論された。また、日本語表現にやや冗長なところや、文意が明確でないところがあることが指摘された。

定量的な分析と詳細な事例観察、考古学的データと突き合わせた分析を通して、先史時代の暴力の様々な類型が明らかになったこと、隈・西小田遺跡について遺跡の中の地区ごとの様相を丁寧に分析し、北部九州弥生社会における暴力のあり方とその社会的位置づけの変化を具体的に明らかにした点は高く評価された。また、314頁にわたる本文で分析の過程が客観的かつ丁寧に記述されていること、88枚の図版と一覧表により、分析に使用した人骨資料の詳細なデータが掲載されていることも高く評価され、分析結果とデータについては国際的な研究に寄与するため速やかに海外に向けても公表することが勧められた。

以上のように、いくつかの未熟な部分は含みつつも、綿密に収集したデータに基づいた研究から先史時代の暴力のあり方について新しい知見を示した本研究の学術的意義は大きく、学位論文として十分な内容であるという点については審査委員全員の意見が一致し、合格と判定した。